

---

# 幸せへのチケット

小田切 隆信

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幸せへのチケット

### 【NZコード】

N9241C

### 【作者名】

小田切 隆信

### 【あらすじ】

作者の実体験を基に制作されました。泣き虫の兄ハジメと、生まれながらにして病気を抱えた妹みやこの、困難を乗り越えていく実話のストーリー

## 第一話ハジメとみやこ

この話は作者の実体験を基に制作したフィクションであります。

1990年12月7日岡山県に男の赤ちゃんが産まれた。

その男の子の名は

末友 ハジメ

ハジメは非常に大人しく、同時に非常に泣き虫であった。両親は、最初の子であつたので可愛がつた。

その4年後1994年6月19日に末友家に今度は女の子が産まれた。その子の名は、

末友 みやこといつ。

だが、産まれてすぐ、このみやこに命にかかる、事件が起きる…  
みやこに最初に起きた事件はなんと、産まれて間もなく、みやこの心臓に穴が空いているということが、発覚した。

直ちに、緊急手術が行われた。手術中のみやこは心臓を停止させ、人工心肺装置に切り替え、仮死状態で行われた。

手術は6時間の長丁場だった。

手術は見事に成功し、心臓の穴は塞がれた。

だが、みやこを襲つた悲劇はこれからが本番だつた……

## 第一「詰みや」の運命

更にみや」を襲つた試練は…

ダウン症：

それは、知的発達や肉体的発達が遅れる病氣である。日本には10万人以外の人がいる。

小学1年生のハジメにはとても難しそぎた。  
ダウン症という病氣を樂觀視していた。

「ダウン症の妹がいたって、他の人と何も変わらないよ」

とハジメは考えていた。だが、世間は甘くなかった…

「お前の家には障害者があるけん、遊びにいかん。」

「障害者があるのやだ」

「まだしゃべれもせんのんじゅう？」子供の言葉とこつのは、時に残酷である。

ハジメは決意した。

「僕は妹を守つて上げられる、いいお兄ちゃんに絶対なる。」

それからも、世間の目と戦いながら成長していった。

それから、5年後

ハジメ小学6年生

みやこ小学2年生

更なる試練が起きた…

ハジメの一歳年下の俊政という男子が波乱を起こした。

みやこに忍びよる魔の手…

ハジメの一歳年下の俊政という男子が波乱を起こした。

みやこに忍びよる魔の手…ハジメにとつても、人生最初の試練である。

この俊政は非常に荒くれものである。

年下イジメを繰り返す奴だった。  
政がある田みやこに田を向けてた…

みやこはイジメられたのだ…

それを知ったハジメのとつた行動は…

俊

### 第3話 お前にわかるか！！

ある日、俊政がみやこに話しかけた。

「お前、小学2年生になつても、言葉一つしゃべれんのんか！？」  
頭の悪い俺でも、しゃべれるの……！

黒鹿を通り越して ハイリーナンヒヤかん！！

そして、みやこを無理やり、男子トイレに連れ込み、殴る蹴るの暴行をした。

そこは通りがかりで先生が来てなんとか止められた

ハジメの耳にも入つてきた。

「…」もはすぐには泣き虫ハシメであったが、その時のハシメは泣くことを通り越して、怒り狂つた。

ハジメは授業中にも関わらず、教室を飛び出し、俊政のいる5年生の教室に飛び込んだ。

「オイ！！俊政！！貴様だけは、絶対に許さん！！

障害者のいる家族の気持ちがわかるもんか……

わかる訳がないよなあ！－！俊政！－！「

と、叫びながら、俊政を馬乗りで押さえこみ、俊政の顔面を思いつきりひたすら殴り続けた。俊政の顔は鼻血だらけになり、更に泣いていた。だが、普段はすぐに人のことを許していたが、この日ばかりは鬼神のごとく殴つた。

教室には、その姿を見て泣きじゃくる生徒ばかりだった。

そして、とうとう俊政が泣き出して、「ゴメンって、ハジメ君ゴメンって、もうみやこちやんイジメから許して下さい。」

さすがに、先生も止めに入った。

だが、ハジメは暴れ続けて、とうとう学校が親を呼んだ。しかし、両親はハジメを叱らなかつた。「お前は、妹のみやこを 守るためにやつたことだ、親として誇りに思つよ。」と、言つた。

その後数日後、俊政がハジメの前に現れて、こう言つた。

「ハジメ君、俺…。これから、ハジメ君が卒業しても、俺がみやこちゃんのこと守るから…。心配しないで。」

ハジメは、

「本当なんだろ? なー? ？」

と、きいた。

「うん。」

ハジメは、みやこを守りとした気持ちが俊政に伝わり、俊政を更生させることになった。

それから、俊政とハジメの関係は良いものになり、今でも良い友ある。

そして、ハジメは小学校を卒業した。

「ハジメの奴、マジ調子のりじやし… 中学になつたら、あいつ殺しちゃうつー…。」

何や？、怪しい影が動き出した…。

「…」のことが、これから起きるハジメの壮絶な、  
つたのである…。

中学生生活の始ま

第4話から中学生シリーズに入ります。  
お楽しみに。

## 第4話天敵

ハジメには小学校の時から、天敵がいた。

そいつの名

は

藤本徹といつ

徹は、幼稚園の時から塾に通い、頭が良く顔も格好よく憧れの的で、クラスでも、人気者だった。徹とハジメ、幼稚園の頃は良く遊んでいたが、小学校に入ると次第に二人の間にズレが生じ始めた。というのも、ハジメはいつも教室で本を読んでいる、大人しい性格に対して、徹は休み時間はいつも外でサッカーをしているような、活発な少年だったので、よく二人の間でこんなやり取りがあった。

「ハジメ！！サッカーせんか！？」

「ゴメン、僕サッカー苦手だし、サッカーをやったとしても、キーパーしか出来ないから、いいよ…」

「なんなんアイツ！？」

付き合い悪いなあ！！

あんな奴ほつといてっこー！」

次第に二人は不仲になり、徹がハジメを差別したり、仲間外れにしたりするようになつた…。

しかし、ハジメは、「仕方ないよ…付き合い悪い僕が悪いんだし…」

という風に今の現実を受け止めた。

だが、徹のイタズラはだんだんエスカレートしていく…

「あれ、昨日置つた消しゴムがない…」

「鉛筆も全部芯があられてる…」「こんなことは、日常茶飯事で…」  
「僕のシユーズが落書きされて、ゴミ箱に入れられると…これは酷いよ…」

小学生のハジメには精神的にキツいものである…

「あれ…机の上に落書きがしてある…死ねって書いてある…」

ある時は徹自ら、「あれえ…?『メンハジメ君の給食にチョークの粉を間違えて入れちゃった…』」

さすがにこれには先生も見かねて、徹を叱つた。だが、徹は聞く耳を持たなかつた。

「アイツのこと、これからも中学になつたら、更にイジメちゃうつで…！」

ハジメと徹は2003年小学校を卒業した。

「中学には一体どんな奴がいるんだろう…」

ハジメは不安で押しつぶされそつだつた…

## 第5話徹の陰謀

2003年ハジメは中学校に進学した。

ハジメが進学した中学はワルが多いことで有名だった。ハジメはあまり自分から友達を作らうとはしなかった。そんなハジメにある男子が話かけてきた。

「えつと…確かに名前は末友君だよね？俺の名前は川藤順次っていうんだ！友達になろうぜー！」

「うん…川藤君、お願ひしますー！川藤君。」

「そんな、堅苦しくなくていいよ、みんなから、俺じゅんちゃんって呼ばれてるから、そう呼べよー！」

「うん…じゅんちゃん」

だが、実はこの順次は、ハジメに接触する前から、ある男と接觸していた。

順次と接觸していた人物といつのは…。

藤本徹だ…。

「オイ！…徹…わざわざ、お前がこの前言つてた、

ハジメとか言つてた奴と絡んできただぜーー！

お前が言つてた通り、いかにも、イジメられキャラつて感じだつたなーー！」

「だろーー？アイツは小学校の時からあんな感じだつたな。でも、一回だけ

なんか妹のこじで、一歳年下の奴ボッコボコにしたこあつたな…。

「それ、めっちゃおもれえがんーーその時のことをもつと詳しく聞かせてくれーー！」

「実はな、アイツの妹…。

「マジかよーー？アイツの妹身障かよーー？それってネタにしてアイツキレさせないと出来んかなーー！」

「まあ、待てよーー。俺にも、もつと仲間が必要だ。じゅんちゃんのそつち系の友達と仲良くなりたいから、俺に紹介してくれ…。」

「わかったーーそつち系の奴らなじいの学校にいっぱい来てるからよーー！」

「サンキューーーー！アイツを殺るのは準備がしつかり整つてからだ…。ハジメの奴今に見てるよ…。」

徹の計画は静かにスタートした…

## 第6話刺客

ある日、ハジメにある  
男子が話し掛けた。

「なあ、お前が、末友  
つていう奴！？」

「うん… そうだけど。  
それが何か？」

「ヒヒヒ… お前の顔…!  
マジ、でめきんじゃわ…！」

なんだ！？」  
初対面なのに…

と、ハジメは心中で思つた。

「君は一体誰なの？  
名前は？」

「ヒヒヒ…! いつなんなん…? 僕の名前か…?  
名前は、助延浩一郎だよ…!」

なんだ…うざいなあ

早く消えろよ！

ハジメの内心は今に立ち去りたかった。  
しかし、浩一郎は執拗に…

「お前は、背も低くて、キモいし、最悪じゃな……」「うぬせいなあ……！」

黙れよ……」

すると、今まで笑っていた浩一郎の表情が急にかわり……

「はあ……テメエー調子のんなよ……お前の小学校の時の」と全部知つとんじやぞ……」

一体誰が……

ハジメの頭には、一人の人物しか浮かばなかった……

ハジメの、背後から、

「オ、イ、助延、誰と話しそよん」

「あ、一、徹とじゅんちやんじやがん……」

何!? なんでその二人がつるんでいるんだ……

ハジメも最初は徹だけが、関係していると思つていた……  
中学で出来た最初の友達の、順次が……

この時、なんとなくだが、全てがわかつたような気がした……。

「騙してたのか……。」

順

「騙した!? 人聞きが悪い こといつなや……」

徹

「ハジメ、俺とじゅんちゃんは単に友達なだけだぜーーー！」

浩

「ヒヒヒーーー俺ほじゅんちゃんに徹を紹介してもらつたんだーーー！」

徹はいい奴だぜーーーヒヒ

徹の奴は一体何を考えてるんだ…  
俺に何をするつもりなんだ…。

徹

「ハジメーーーこれから、じゅんちゃんや助延と仲良くなってくれよーーー！」

「うん…わかった

これは、徹が送り込んできた、刺客とでもいおうか。

刺客はまだこれからだった…。

ハジメは、中学生になつたら、陸上部に入ろうと決めていた。

ハジメは、小学生の時からチームプレーが苦手だった。だから個人競技の陸上部にした。

というのが、本当の所だった。

陸上部新入生は僕以外にもいた。

その中でも、ひとり身長が高い男子がいた。

名は、前田正人という。

こいつは、成績優秀でスポーツ万能という、絵にかいたような、優等生だった。

先生からの信頼も熱かつた。

だが、本当は…

裏では、かつあげや万引きを平氣とするような奴だ。

ハジメも、一緒に部活をしていくなかで、薄々は気づいていた。彼もまた、徹からの刺客の一人であると…

正直、走ることに関して正人には全く歯が立たなかつた…

そんなある日、正人がハジメに突然こんなことを言つてきた…

正

「末友……ちよつと、金くれん?」

ハ  
「なんで!?」

正  
「いいじゃん!..」

ハ  
「でも、金ないし…」

正  
「うつせえ!..ええけん 金だせや!..カスが!..」

ハジメは正人にこつやつて金をかつあげされる日々が始まった。

かつあげは週に二回  
金額は千円から二千円  
程度だ

だが、この頃のハジメは定期的にお小遣いを貰っていた訳ではなく、かなり厳しいものだつた…

だが、正人のイジメはかつあげだけにとどまらず、部室で  
「オイ!..クソ友!..  
今日の部活のメニューなんなん?」

「え!..?知らないよ…」

「はあ、知らんじゃねえだらうが!..テメヒー体だせや!..」

「ちゅうどーーー何するん?」

部室にはボコ、ボコ という、鈍い音だけが響き渡った…。

周りの部員も誰一人として、助けようとなかった…。

「なんだ…ここまで

されんといけんのん…」

「徹にとつてひなこ奴は みんなから、殺られる運命なんだよーーー

まさか、こんなところまで、徹の魔の手が伸び てこよひとは…

ハジメには、想像もつかなかつた…

部活中だけにのみならず、学校に居ても、突然 ハジメの教室に  
浩一郎が入ってきて、

「おーい、末友!! 今田もキモいなーーー」

といい、おもむろにハジメのノート全ページに 落書きをしたり、  
シャーペンを壊したりと、まともに文房具が揃つた日はほとんどな  
かつた…

更に、妹のみやこにも不幸が…

## 第8話狂い

ある日父の辰巳があなじとに気がついた

「あれ…なんか

みやこの姿勢左に傾いてないか？」

確かに言われて初めて

みやこの体が左に傾いていることに家族が気が付いた

母美輪がみやこの背中を見てみると…

なんと背骨自体が左に曲がっているではないか！！

辰巳と美輪は慌てて病院にみやこを連れていき レントゲン検査をすると左に四十五度傾いていることがわかった

医者から告げられた病名は…

脊髄曲湾曲症

といつものであつた 医者にはもつと大きい病院に行き入院して

背骨を針金で真つすぐにする手術を受けないといけないといつ

家族一同絶句した…

一番悲しんでいたのは母美輪だった…

美

「なんでもみやーじだけがこんな田にあつん…  
なんでもつと早く気付いて上げれんかったんじやん…」

美輪は数日間泣き続けた…

ハジメも同じであつた…

ハ  
「一番やばいおつたわしが気付かんかったんじやん…兄として最悪  
じや」

それから一ヶ月後まで 病院にはあらゆる手術の予定が詰まつて  
いて  
みやーじの手術はそれからになった

一応医者が言つことは

この手術自体はそう難しくはないが、一、二、三ヶ月は痛みで歩く」と  
や  
ベッドから降つることも出来なくなるらしい…

それから末友家の生活は狂い出した…

祖父隆之と祖母藤枝が 些細なことでケンカし 隆之が家出を  
する騒動があつたり…

辰巳と美輪も手術のことやいろいろなことで気が立つていたことも  
あり 滅多にケンカをしない一人が大喧嘩をした

なんとかハジメと藤枝の二人が間に入つて納めたが、あらゆること  
が狂い始めた…

そしてハジメが一番恐れていたことが起きた…

ハジメがもつとも恐れていたこと…

妹が病気にかかっていることが徹にバレてしまった

「どうこつたルートで広まつたかはしらないが  
恐らく早いペースで

その情報は広まつた

徹  
「オイ！…お前の妹みやこさんだけ！？なんか背骨が曲がる病気  
か何かになつたんだろ！？最高にお前んとこ色々なことが起きるよ  
なあ！…マジでこつん家の家族に生まれなくて良かった…！」

ハジメは何も言い返せない自分に腹が立つた

自分のことならまだしもみやこのことや家族を馬鹿にされたことこ  
腹が立つた

だが言い返せなかつた

言い返すことによつてまた何かやられる…  
ビビッていた…

みやこの手術が2004年の8月に行われることが決まつた

月日は経ち2004年

ハジメは中学一年

みやこは小学四年になつた

更にハジメに対するイジメはエスカレートしていった…

ハジメの給食はいつも何かがないのは当たり前で  
体育の授業中はハジメふの暴力の時間となり

他の授業も必ず文房具の何かが壊されていて満足に授業も受けるこ  
とが出来ず

美術の作品のほとんどは破られたり落書きをされたりで、満足に提出  
することもままならなかつた…

かなりハジメは精神的に追い詰められていてだんだんと学校を休み  
がちになりました…

それでも不登校にはなりたくなかったハジメは苦しみながら学校に  
バスで通つていた…

バスの中でも徹にゴミをぶつけられたり、イジメは行われていた…

バシの中でもハジメは絶えず震えていた…  
体が震えるのがこの頃から癖になりました…

とうとうハジメの体は限界を迎えて  
ストレス性の胃潰瘍になつてしまつた…

ハジメは両親に心配をかけまいと

「ちょっと夜遅くまで勉強したり、テレビを見たりして疲れが溜ま  
つただけなんよ！…」

と嘘をつくといつもハジメなりに家族に負担をかけまいとした…

さすがのハジメも薄っぺらと自殺することを考え始めた…

胃潰瘍が治りまた学校に登校してみると机には  
あらゆる落書きが書かれていた…

その内容はみやこのことに関するものであつたりハジメ死ねや  
もつともハジメにダメージをこうえた落書きは

末友お前が消えることを学校中が望んどんじゃ…  
ハジメは心を決めた

俺が消えることをみんなが望んどんなら  
叶えて上げよい…  
それでみんな喜ぶなうば…

その日の深夜：

ハジメは一人森に行つた

ロープと踏み台を持って：

## 第10話職場体験

ハジメは持つてきた踏み台を木の幹のそばに置き、木の枝に持つてきたロープを巻き付けた…

そして、台に足を乗せ、ロープの輪に首を入れようとした時…

ある子供たちの笑顔がふと頭をよぎった…

それは、ハジメが6月に あつた職場体験の時のことだ…

中学では6月ぐらいになると職場体験がある、そこでハジメは幼稚園に行くことにした。特に意味はなくただ子供と遊べて楽しそうだと思ったからであった。

幼稚園はハジメが通つていた幼稚園に行つた。

幼稚園児たちは最初は恥ずかしがつてなかなかハジメに寄り付かなかつた。

ハジメもとても人見知りが激しく、恥ずかしがり屋なので子供たちに近寄りにくかつた…

ハジメはどうしても、この状況を打破したかつたので…

「ヤバい……死にそうだ……」  
と叫びながら倒れた。

すると、子供たちが心配そうに、ハジメに近寄ってきた。  
それを見計らって子供たちを捕まえた。

作戦通りだった。それをきっかけに子供たちと打ち解けた。  
子供たちを観察しているといろんな子供がいてとてもハジメは楽しかった。

その中にひとりぼっちになつている子がいた。その子の名はよしあきといふ。一見普通の子供なのだが、とても落ち着きがなく、いつも暴れ回っていた。

ハジメは、

「凄い、やんちゃな子だな……」

と、思つていた。

だが、それには深いわけがあった……

それは……神経に障害があつたのである……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9241c/>

---

幸せへのチケット

2010年10月10日23時13分発行